



# 宮崎大学学術情報リポジトリ

## University of Miyazaki Academic Repository

ユルゲントーデンヘーファー 著  
津村正樹、アンドレアス・カスヤン 訳  
『「イスラム国」の内部へ 悪夢の10日間』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 日本独文学会西日本支部, Herausgegeben von der Japanischen Gesellschaft für Germanistik-Westjapan 公開日: 2020-06-21 キーワード: 作成者: 杵淵, 博樹 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10458/6148">http://hdl.handle.net/10458/6148</a>

## 書 評

ユルゲン・トーデンハーファー 著  
 津村正樹, アンドレアス・カスヤン 訳  
 『「イスラム国」の内部へ 悪夢の10日間』

杵 渕 博 樹

ドイツのベストセラーの邦訳である。タイトルのとおり、「イスラム国」(IS)をテーマとし、その目玉は現地取材だ。本書が執筆された当時、彼らに対立する勢力との戦闘を継続しつつ、さしあたり国家としての統治を実質化しようとしていたのは、イラクとシリアのトルコ国境付近で、イラク領内、シリア領内それぞれの拠点都市がモースルとラッカであった。2017年8月現在、両都市ともに、その大部分はイラク軍、クルド人部隊等反IS勢力に制圧されている模様だが、いまだ戦闘は続いており、周辺にはまだISの拠点が残っているという状況らしい。

原題に「悪夢」はないが、そのような形容にふさわしい、不安と恐怖に満ちた奇妙な冒険譚を、本書は確かに含んでいる。ただ、その「10日間」そのものを扱う箇所が本書全体に占める割合は案外少ない。本書の本文は11頁に始まり、318頁で終わるのだが、現地レポートは187頁から302頁である。これが全10章中の第8章にあてられている。なかなか現地レポートが始まらない点はおそらく多くの読者の期待を裏切る。しかし、この構成には必然性がある。

一般に、何年にも渡って戦場となっている地域の状況を知ることは難しい。紛争当事者たちのキャンペーン以外の情報もたらされる可能性は、危険を冒して現地を取材するジャーナリストたちの奮闘によってかろうじて保たれる。しかし、ここで問題になる「イスラム国」は基本的にジャーナリストによる取材を認めてこなかった。別の言い方をすると、欧米のジャーナリストたちを見つければ捉え、人質にし、身代金が取れなければ公開処刑してきた。ところが、本書の著者トーデンハーファーは、実際に「イスラム国」に入り、いくつかのまとまったインタビューを含め、住民の話を聞き、同行カメラマンに多くの動画と写真を撮影させ、生きて帰って来たのである。

一体彼はどうやって不可能を可能にしたのか。簡単な「イスラム国」入門とも称すべき第一章、昨今の中東情勢の混乱の本質を説明する第二章を経て、著者は第三章でジャーナリストとしての自らの履歴とポリシーを明らかにし、続く諸章で今回の大胆な取材行に先立つ入念な準備作業を報告している。あらかじめこれらの情報が提示されるからこそ、読者は著者の企てとその達成の意味を考えることができるのである。

トーデンハーファーの経歴は異色である。1940年生まれの彼は裁判官から政治家に転

身、1972年から1990年まで連邦議会でキリスト教民主同盟の議員を務め、その後ジャーナリストとなる。彼の仕事の特徴は自ら紛争地帯へ向うことだ。アフガニスタン、イラク、シリア、パレスチナ、どこへでも乗り込む。日本に置き換えて言えば、さしずめ元自民党国会議員の国際派ジャーナリストである。国会議員時代も含め、一貫して彼のモットーは「双方の話を聞く」である。1980年代のアフガニスタン紛争では、ムジャーヒディーンに接触すると同時に、ソ連軍の司令官と会談し、チリでは反体制派と会談するばかりではなく独裁者ピノチェトとも政治犯の釈放を求めて直談判したと言う。最近では、シリアのアサド大統領にもインタビューしている。これらの行動には、スタンド・ブレイの臭いがしないでもない。侵略者、独裁者、虐殺者との対談とその報告は、彼らの言い分の宣伝につながりかねない。その意味でスキャンダラスである。実際トーデンハーファー自身が本書でも嘆いているように、彼はその都度激しいパッシングを経験する。国際社会で「悪」のレッテルを貼られた側との直接対話を求める彼の倫理的担保は、彼らの本音を引き出す工夫と、彼らに対する批判的立場を明確に打ち出す態度である。彼の立場は中立ではないし、客観性を標榜することもない。にも係わらず、あらかじめこちらに対して警戒し、敵意を抱いてさえいる取材対象の信頼を彼は獲得しなければならない。この困難な課題に彼はあえて挑み続けてきた。

今回の企画で、彼は「イスラム国」を内側から見て来ることにこだわる。ISは、極めて残虐な自己イメージを振りまいているが、その真意はどこにあるのか。彼らの支配地域はどのような状況になっているのか。トーデンハーファーはふたつの大きな懸念を抱いている。ひとつは、ISのせいで大部分は穏健で平和的な全世界のイスラム教徒たちが「テロリズム」と結び付けられてしまう危険。もうひとつは、ドイツを含む世界中の若者が戦闘員を志願してISにやってくる事実だ。これは「イスラム原理主義」全体、イスラム教全体に係わる問題である。欧米諸大国同様、ISもまたネットを介したメディア戦略に長けている。事態を放置すれば、〈虚像〉がそのまま「真実」と化し、歴史的事実となってしまうかねない。〈実像〉が求められる所以である。

彼はキリスト教徒だが、イスラム教とその信徒たちに対して最大限の敬意を払っており、同時にあらゆるテロリズムを許さない立場を取っている。侵略戦争もまた「テロ」である。それは「富裕者のテロリズム」であって、「テロは貧者がやる戦争」なのだ。2003年のアメリカのイラク戦争は、結局大儀のない侵略であった。そもそも「この200年間、アラブの国が西側の国を攻撃したことは一度もない。攻撃者は常にヨーロッパの強国であって、何百万人というアラブの一般市民がその都度残忍に殺害された」のである。石油利権を支配せんがために、欧米列強は中東に介入し続けてきた。中東の政治的混乱と、イスラム原理主義台頭の背景には、かつての〈むきだしの植民地主義〉、現在の〈姿を変えた植民地主義〉があるのだ。中東で使用されている武器を供給しているのも、結局は欧米の大国である。

ISを含め、イスラム原理主義者たちはその点を突く。「西側」流の民主主義と人権思想は、その理念はともかく、現実にはいつもダブルスタンダードを伴う欺瞞的なものだった

た。その批判自体は歴史的事実に基づく正当なものだ。嘘と不正を許さない、ある意味で健全な正義感を持つ者であれば、共感して当然だ。だから問題なのである。特に、イスラム国の発する「世界征服の邪魔するやつは皆殺し」というメッセージは、ドイツ、日本を含め「西側」住民にとっては甚だ都合が悪く、空恐ろしい。しかしながら、そんなISを潰すために、アメリカが「無人機」をも動員して空爆を繰り返す情景もまた悲しい。住民もろとも町を焼き尽くす以外に、我先に自爆テロを志願する狂信的武装集団に対抗する手段はないのだろうか。

著者は2014年夏以降、数人のIS戦闘員とネット経由でコンタクトを取るが、9月にIS側が接触の窓口を指定してくる。それ以降、三ヶ月以上に渡って、ドイツ出身のアブー・カタダことクリスティアン・Eとのスカイプを通じた取材交渉が続く。読者はこのプロセスを、実際の対話の記録を通して追体験することができる。それはインタビュー的内容を含むスリリングなものだ。率直で、場合によっては不躰な質問をぶつけながら、ある種の誠実さを巧みにアピールしつつ、執拗かつ慎重に現地での身の安全の保証を要求するトーデンヘーファーのタフなしたたかさは驚嘆に値する。

アブー・カタダは三十代の青年で、「生粋のドイツ人」である。著者はデュッセルドルフでこの男の母親に会い、取材している。彼女の息子クリスティアンは、正義感の強い聡明な少年だったようだ。スポーツマンでアイスホッケーのプロを目指していたが怪我で夢を絶たれる。イスラム教徒の親友が学校で校長から差別的な扱いを受けたのに憤って抗議し、結局これをきっかけに退学。さらにその親友が国外追放を強いられる事態となり、クリスティアンは彼を匿って脱出させようとするが失敗。おまけに同棲していたガールフレンドに逃げられて落ち込み、コーランとアラビア語の勉強に没頭するようになったという。その彼が、今や、IS指導部に信頼されるスポークスマンである。

このケースが、西側諸国からISを目指す若者たちの典型かどうかはわからない。しかし、狂信的なテロリストの楽園が、その気になりさえすれば、現実的な選択肢としてそこにあるという事実は憂鬱だ。等身大の具体例は生々しい。挫折して傷つき、生きがいと死にがいを求める若者の性急なまじめさが、絶対的に正しい何かを渴望してしまうのだ。正しい行いをして神によって義とされること。神によって報われること。IS戦闘員にとって、それは、信仰の敵を殺すことによって、自爆テロで「殉教」することによってより確実に実現する。これは歯止めなき資本主義への、形骸化した「民主主義」への警鐘でもある。権力者の嘘がまかり通る社会は、信ずるに足るモラルを希求する若者を絶望させる。

2014年12月、トーデンヘーファーはトルコ国境を越え、シリア領内へ入る。31才の息子フレデリックがカメラマンとして、その友人が記録係として彼に伴い、IS側からは常に目出し帽をかぶっていて顔を見せない英国出身らしき運転手とアブー・カタダ、さらにもう一人のドイツ出身戦闘員が付き添う。断続的に軟禁状態に置かれながらも、取材陣はラッカとモースルの町を歩き、住民との最低限の接触にも成功する。病院では医者、裁判所では裁判官の、警察では警察署長の、街頭ではたまたま出会った捕虜の話

を聞く機会も与えられる。しかし、複数の戦闘員が監視する状況下では、不満や批判が聞かれるわけもない。ドイツやアメリカ出身の戦闘員たちは、彼らの生活について誇らしげに語る。タバコを吸っても音楽を聴いてもムチ打ち、婚外性交渉は石打ちで死刑、40米ドル以上のものを盗めば手の切断、重罪を犯せば公開処刑、奴隷制は合法。トーデンヘーファーは繰り返し、コーランの神の「慈悲深さ」を想起させ、彼らの残虐さを咎めるが、戦闘員たちは彼らを上回る西側の残虐さを引き合いに出して反論するだけだ。しかし、彼らが何よりも忌み嫌っているのは「背教者」としてのシーア派である。その点は著者も注意深く確認しているところだが、世界に1億5千万人いると言われるシーア派イスラム教徒を、ISの教えに改宗しない限り、彼らは情け容赦なく皆殺しにするつもりでいる。

ドイツでのテロの可能性、ドイツ出身戦闘員のドイツへの帰国の可能性についても、著者は質問している。答えて曰く、いずれヨーロッパも征服するが、ヨーロッパでのテロは今のところ計画されていない。ただし、現地で暮らすISの賛同者が自発的にテロを起こすことはありうる。外国人戦闘員の帰国は基本的にはありえない。その必要がないから。ISからの出国は裏切りのようなものだから。

狭い意味での情報価値だけに限定して言えば、現地に行つて初めてわかつたことは僅かかもしれない。さすがの著者も今回は最高権力者には会えなかつた。ISの主張についても、アブー・カタダの人物像についても、スカイプでの対話の段階で既におおよそ明らかになっていた。IS側は、国家としての統治が行き渡り、住民が安心して日常生活を送っているということをアピールしたかつたのだろうが、住民が一見普通の暮らしをしているという印象は、言論の自由のない狂信的戦争国家の統後に共通する表層に過ぎない。むしろ地下組織に加わつた現地住民が独立系メディア経由で発信する情報の方が、被支配者の実情をよく伝えているのではないか。

だが、トーデンヘーファー一行が、IS支配地域では前代未聞の異物として、本来なら処刑されているはずの種類の間人として、行く先々で注目を集め、監視役を怒らせ、敵意をむき出しにした戦闘員に威嚇される様子は、現地に赴かねば観察されえなかつた現象である。既知の情報もまた、直接会つて話したからこそ、より詳細なニュアンスを含めて確認できたのだ。限られた範囲ではあつても、刻々と変化していく状況の中の一瞬を捉えた稀有な記録として、本書はやはり貴重な資料であると言えよう。分かり合うことのできないであろう相手、自分とはまったく異なつた世界観を持つ相手と、それでも最後の希望を捨てずに直接会つて対話しようとする著者の姿勢は、暴力ばかりが荒れ狂う昨今、平和を願う者すべてにとって示唆に富むものと言える。内容はどうかあれ、結果はどうかあれ、真相を知るために他者と向き合う労を惜しんではならないのだ。

(白水社 2016年)